The Days of DAYS JAPAN (1988.3.〜1989.12.)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/706

『DAYS JAPAN』〈1988年3月～1989年12月〉の日々
―90年代若者史の背景を探る―

The Days of "DAYS JAPAN" 〈1988.3.～1989.12.〉
―The Background of the history of youths during the '90 th ―

江森一郎
Ichiro EMORI

目次

1) まえがき
2) 『DAYS JAPAN』の創刊と休刊
3) 80年代末期の教育政策
4) 『DAYS JAPAN』の概要
5) 『DAYS JAPAN』の教育関連言説
6) おわりに

1) まえがき

わが国では、70年代に若者意識に大きな変動があったことは、定説になっていると言っても良いと思う。

たとえば、吉本隆明は、連合赤軍による「浅間山荘事件」のあった1972年前後の時代は、日本社会が消費社会に大きく移行し、若者意識が変わる出発点であったとする。(1)

大塚英志は、「かわいい」をうりにした商品が多種多様に展開するのは「74年をはさんだ3・4年」であるとし、少女雑誌『りぼん』の読者であった少女たちが新しい若者文化を牽引し、少年の一部もその影響をうけ、後のオタク世代の起源になったとする。(2)

また、千石保は、同時代の意識調査の分析から、77年頃にそれまで日本人を支えてきた勤勉の価値観が崩れ、「なんのために学ぶか」「なんのため働くか」が問われだし、その時その場の楽しさを価値とするコンサマトリーな価値観が浸透するなど、明らかな変化が起ったとしている。(3)

図1　『DAYS JAPAN』創刊号

平成14年9月30日受理

それ以後、高度消費社会の実現を背景にした80年代の若者がどのような環境のもとに日々を過ごしていたかについては、社会学の宮台真司が次のように総括している。

「70年代にはあまりふるわなかったコンビニは、82年に〈爆発する。〉80年代後半のコンビニは、家・学校・地域に居場所のなくなった子どもたちに最後の〈居場所を提供する〉と同時に、彼らを家・学校・地域から〈第四空間＝都市的現実〉へと開放するという、両義的な機能を体現していた。

コンビニの爆発的増加は、ワンルームマンションの爆発的増加とパラレルだった。また、通信の発達は、86～87年の第一次テレクラブーム、87～88年の伝言ダイアルブーム、Q2ツーショットブーム（第二次テレクラブーム）などn×nメディアを使った仮想空間上のコミュニケーションを発達させた。」

こうして若者の仮想空間でのコミュニケーションは急激に広がり、それが後の女子校高校生の援助交際ブームなどの下地になったとする。(4)

また、「80年代に拘泥している」（大塚英志のことば）といわれる精神科医・香山リカは、80年代末の女性誌に〈がんばった私にごほうび〉〈クリスマスは私へのプレゼントを探す〉〈もっと私を磨いてあげる〉というように、私という言葉が氾濫しだした事に注目している。(5)

なお、大塚英志にも若者の「私探し」傾向について同様の指摘がある。(6)

ここでは、学校制度の機能不全の進行と平行して展開した若者文化、すなわち70年代に兆し、80年代に成熟化していた新人類、オタク文化の背景として、どのような社会状況が存在したのか。それを現在の時点から振り返えると何が反省されうるのか。このような問題関心から１９８９年前後の社会・教育状況を、日本の最大の出版社から発行されたが短期間で終わった今では、忘れられてしまった一つの雑誌を中心に探ってみたい。

その際、大塚英志が１９８９年の年を次のように概観している事を予備知識として確認しておきたい。

「89年という年は昭和天皇が崩御し、米ソの冷戦が終わり、ベルリンの壁が崩壊した年です。戦後という時代を支えていた制度の終焉が具体的に見える形で現れました。

そしてもう一つ、高度消費社会の寵児であったはずのぼくたちの世代（引用者注、オタク世代）の不毛さや不可能生をあたかも象徴するように、幼女連続誘拐殺人事件の宮崎勤が逮捕されます。バブルは既に崩壊の一歩手前で、子ども達の間では、ドラえもんやサザエさんの最終回に関する不吉な都市伝説が流行していました。戦後という時代とそして戦後という時代の到達点であったはずの八〇年における高度消費社会は、八九年という年にほとんど同時に終わったかにみえました。オウム真理教が急速に勢力を拡大するのもこの年でした。(7)」（傍点引用者）

2）『DAYS JAPAN』の創刊と休刊

１９８８（昭和63年）年3月10日発売・創刊（４月号）された「ビジュアルノンフィクション」誌『DAYS JAPAN』（講談社）は、特別の気負った宣言もないまま創刊された。しかし、編集長・土屋右二は、その編集後記（BACKSTAGE）で、「東アジア文化圏ではかって書物は尊敬と信頼の対象であった」とし、「いつ

'88年3月以降関連事項年表

88年	3月	日	青函トンネル開業。東京ドーム球場開場記念オープン戦。『DAYS JAPAN』創刊。
	6	18	川崎市汚職（リクルート事件の発端）
	11	11	米大統領選後ドル急落。
	12		『少年ジャンプ』発行部数500万部に到達
89	1	7	昭和天皇崩御、六日間の歌舞音曲の自粛。平成と改元
	2	13	リクルート社前社長・江副浩正逮捕
	3	30	女子高校生コンクリート詰め殺人事件で少年逮捕
	4	1	消費税スタート
	5	19	北京に戒厳令発令。（「天安門事件」）
	6	2	宇野内閣成立
	6	4	天安門事件武力鎮圧
	7	2	東京都議選挙で自民党惨敗、社会党大躍進
	7	23	参議院選挙で自民党空前の大敗、過半数割れ。社会党大躍進、いわゆるマドンナ旋風、幼女連続誘拐殺人事件で宮崎勤を逮捕
	8	8	総裁選により海部内閣成立
	9		手塚治虫死去
	9	27	ソニーがコロンビアを買収
	10	31	三菱地所、ロックフェラーグループ株、51％所有
	11	9	東独、「ベルリンの壁」崩壊
	11	15	坂本弁護士一家失踪、公開捜査に（のちオウム真理教の犯罪とわかる。）
	12	25	ルーマニア大統領夫妻処刑　『DAYS JAPAN』休刊
90	8		イラク軍クエート侵攻
	9		多国籍軍および近隣諸国に合計三十億円の経済援助決定
91	1	19	「湾岸戦争」開始
	11		宮沢りえ・ヌード写真集『サンタ・フェ』発売、初日で数十万部売り、一カ月で百万部を突破
	12		社会主義国家ソ連邦消滅
92	3		佐川急便疑惑はじまる
	6		PKO協力法成立
	12		水戸市の中学生三人、集団自殺
93	1		山形県中学生マット死事件
	2		文部省、業者テスト即時禁止を通知
	3		金丸自民党副総裁、脱税容疑で逮捕
	6		羽田・小沢派が44人の議員とともに自民党離党．東京都議選で日本新党20議席をとり、大躍進
	7		衆議院選挙で自民党過半数割れ。細川連立政権誕生
	9		ゼネコン汚職で清水建設会長、本間宮城県知事逮捕
94	6		村山連立内閣成立
95	1		阪神淡路大震災
	3		地下鉄サリン事件（オウム真理教事件のはじまり）

公刊期間

の日からか、ある種の書物は道具であり、エンターテイメントになってしまった。私は、それはそれでいいと思っている。しかし、尊敬されないまでも、読者の信頼を得られない本や雑誌だけは作りたくないものだ。[8]」と高い「硬派」としての抱負を述べている。

しかし、結果的には、１９８９年12月発行の１９９０年１月号を最後に突然休刊してしまった。あわせて22冊の発行で終わったわけである。

その休刊理由は、少なくとも紙面から見る限りは、「アグネス誤報の一件で読者の信頼を失った」ということである。土屋右二編集長は、終刊号の「編集長から、お別れの言葉」のなかで、「私はかって創刊号の編集後記に書いた〈たとえ尊敬されないまでも、読者の信頼を得られない本や雑誌だけは作りたくない〉という言葉を会社が良く理解してくれたからだと思います。昨今、読者の信頼を裏切るような出版物が多いなかでの、会社の大英断であります。[9]」と書いている。

なお、休刊の原因となった「アグネス誤報の一件」については、

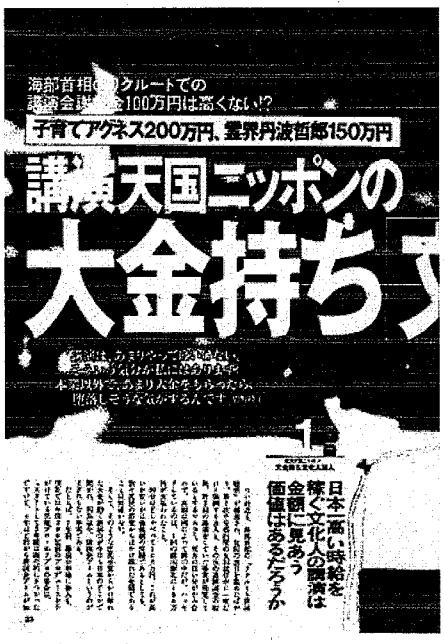


図２　『DAYS JAPAN』89年11月号特集＜講演天国ニッポンの大金持ち文化人30人＞（部分）

１９８９年12月号に「アグネス・チャンさんにお詫び致します。」という一文が載せてある。ここには、次のように謝罪している。

すなわち、「本誌11月号特集〈講演天国ニッポンの大金持ち文化人30人〉の記事中、歌手アグネス・チャンさんに関する記事に重大なる事実誤認があり、またアグネス・チャンさんの名誉を著しく傷つけるような誤った記載をいたしました。以下、訂正してお詫びいたします。」とし、アグネス・チャンさんの事務所から「通常約２時間の講演で都内であれば80万円、地方で一日拘束になる場合は１００万円と明確な回答を受けていたが、２００万円としてしまった。また、企業主催の時は「お車代」を１５０万～２００万とふっかけるとか書いたのも、アグネス・チャンさんは、企業主催の講演会に出席し、講演をしたことは今まで一度もない。また、講演の内容度評価を「一部の業界通といわれる人たちの独断と偏見、風聞や憶測で」おこない最低に評価した。さらに、「全国紙の各新聞はじめ各雑誌、JR、地下鉄、私鉄各線の電車等」に「子育てアグネス〇〇万円、霊界丹波哲郎一五〇万円講演天国ニッポンの大金持ち文化人30人」と宣伝広告するなど、「アグネス・チャンさんの名誉を著しく傷つけた」ことを、「衷心よりお詫びする」ものであった。

当時前年から続いていたいわゆる「アグネス論争」が泥仕合化しており[10]一方の論客・林真理子を主要なライターとしていた本誌が、林真理子よりの情報を不用意に載せた事が、命取りになったかと思われる。

それはともかく、このような謝罪姿勢からみても、『DAYS JAPAN』は正統派論壇誌的側面が強いが、他方で高級志向の衣食住、レジャーにかかわるトレンディな車やワープロ、高級時計などのハイグレードなイメージを煽る多数のコマーシャルが満載されて

おり、当時の好景気、高消費を煽るトレンディ誌とかわらぬ内容の企画、記事も多い。超有名人の講演料を八十万円と書こうと、二〇〇万円と書こうと、読者感覚からすると大差なく感じられる時代でもあったかも知れない。後でも触れる村上春樹が、「(80年代には――引用者)60年代的価値観を支えてきた基盤というものが完全に消滅しちゃったわけです。ネガティヴがポジティヴを内包し、ポジティヴがネガティヴを内包している。要するにあらゆる種類の価値がお互いに保険をかけあっているようなものなんです。」[11]とさすがに巧妙に表現している80年代の日本社会の特徴から、そのような社会構造自体を摘発・警告することを使命とするこの雑誌自体が免れていない、というアイロニーがある。

リクルート事件で次々に政治家や高級官僚の不正・汚職が暴かれ、政治は混乱を極めながら、好景気のみ持続するかのように思われ、何がなんだか誰も明快なイメージを結べない不透明で分裂的な時代の性格を、その紙面自身が反映していたような雑誌なのである。

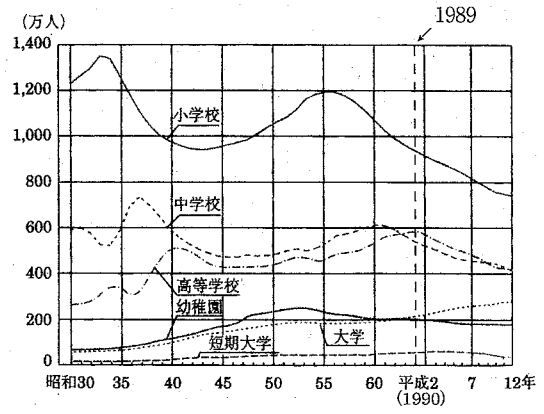
3) 80年代末期の教育政策

他方で、1889年の教育政策をみてみると、88年8月7日に最終答申(第三次答申)を出して終了した臨教審答申の具体化を着々と進めるはずの年だった。

まず、「国際化と日本国民のアイデンティティ確立」「個性重視」にそった87年12月24日の教育課程審議会答申に基づき、学習指導要領の改訂が進められ、89年には告示される。戦後教育の象徴ともいえる「社会科」が部分的に解体し、体験学習を中心とする小学校一、二年生の「生活科」が誕生し、高校で地歴科と公民科が登場したのは、この時期の改訂の結果である。また、中学校で習熟度別学習が導入される。君が代・日の丸にかかわる指導強化も進められ(「望ましい」から「その意義を踏まえ、指導するものとする」へと教師に指導を強制するものとなった。以後、多くの教育関係者の処分者や自殺者を出すことになり、最近まで及ぶ。高校家庭科の男女共修も決められる。また臨教審のもう一つの柱「生涯学習」体系への移行のため社会教育局を生涯学習局に改称させて筆頭局にし、生涯学習振興課を新設し、生涯教育体系の整備に着手した。

しかし、森喜朗元文部大臣(のち首相)、高石邦夫文部事務次官が加藤孝労働事務次官とともにリクルート株を譲渡を受けていた事が判明し、88年10月10日、高石元次官が辞任に追い込まれていた。江副リクルート社長は、教育課程審議会委員やその高等学

図3　学校種別在学者数の推移



(注) 高等学校は本科・専攻科・別科の生徒，大学は学部学生のほか大学院・専攻科・別科の学生及び聴講生・研究生等を含め，短期大学は本科学生のほか専攻科・別科の学生及び聴講生等を含む。
資料：文部省(現文部科学省)「学校基本調査」

＜平成13年版『青少年白書』117p、一部追加＞

校教育分科会委員、大学審議会委員をもつとめていた。文部省関係も労働省関係も学生の進学情報や就職情報産業を自社に有利に展開するための手段であったことは、誰にも推測できた。

要するに、官僚不信がこの時代にはすでにトップにまで及び、文部省に対しても疑惑が大きく広がり、個性化や生涯教育体系への移行は、スムーズに進め得なかったと思われる。他方、「団塊ジュニア」世代が中、高校生に達し、いずれも６００万人前後と70年代以後最高の過密状態になっていた。

周知のように、１９８９年は世界史上の大変動期でもあり、２００２年には日本の「バブル崩壊」が現出した。この雑誌の刊行期間には、まだバブル崩壊が多くの人に自覚されてはいなかったが、他方で、現在の日本社会の混迷をもたらした要因は、すでに１９８８年頃には一部の人々は警鐘を鳴らし続けていたことは、以下の『DAYS JAPAN』の叙述内容からも分かる。

4)　『DAYS JAPAN』の概要

創刊号（四月号）の特集は、原子力発電所事故の恐怖を訴えた「四番目の恐怖」[12]であった。チェルノブイリ、スリーマイル島、ウインズケールに次ぐかもしれない青森県六カ所村の「四番目の恐怖」に「歯止めをかけたい」というねらいであった。編集後記によれば、広瀬隆『危険な話』をベースに半年前から周到に準備されたものであった。

欧米では、スエーデンをはじめ90年代には原発全廃方針が決められる傾向がはっきりし、最近の日本の原発関連不祥事を考えると、先見性のある指摘だったといえよう。

このほかの点でも、今日からみて興味深い記事が、創刊号にも沢山載っている。たとえば、「米国が秘密裏に支援するアフガン・ゲリラの実態!!」である。この記事には、アフガン地区のソ連への対抗上アメリカがゲリラ支援に力を入れていた事が書かれている。[13]アフガン地区で一昨年末から９・11の「同時多発テロ」の報復として展開した掃討作戦が、もともとアメリカの播いた種から生じていた事実を再認識させられる。

また、「ハマコー三人組」では、松田九郎議員とともに鈴木宗男議員のひどいヤジが取り上げられている。「鈴木氏は故・中川一郎氏の秘書あがり。同氏の首つり自殺後、長男の中川昭一氏（現自民代議士）と跡目をめぐって骨肉の争いの末に当選したが、〈中川一郎氏の自殺の原因を作った裏切り者〉などの噂が流れ、いつ落選してもおかしくない）などと紹介されている。[14]

昨年から今年に入り、周知のように鈴木宗男議員の一連の汚職摘発があったのであるが、すでにこの時点から、かなり要注意の議員であったことが分かる。

五月号では、鎌田慧「〈東京乗っとり〉作戦の全貌を暴く」がメインの特集になっている。ここでは、地上げの利権構造が詳細に暴かれている。[15]また、この雑誌の主要なライター広瀬隆、藤原新也の対談がある。この中で二人は次のような部分がある。

「広瀬　何が産業を動かしているか見ていると、土建業ですね。破壊しないと、あの人たちは仕事として食っていけないわけです。アメリカのように広ければいいけど、こんなちっぽけな島をコンクリートで徹底的に埋めてしまうわけです。一体何の力があいうものを止めるのかなと思うと、絶望的になりますね。工事量を総量規制しないと、このままでは、全部破壊して終わりますよ。

藤原　日本というのは企業国家でしょう。企業のレベルに沿って国家が動いている。企業がもうけた金で土地を買い占めて、僕ら家が買えなくなっちゃう。じゃ、企業の人間がいい目みたかとい

うと、企業で一生懸命働く人間も首をしめられているわけですね。それじゃ社長や会長はどうかというと、ものすごくストレスがたまっている。だれでもがみんな困っているわけですよ。結局企業体というのは、人間の手から離れた一つの怪物みたいなものですね。それを取り押さえることが誰にもできないような状況がある。原発なんかが勝手にどんどん増殖していくのも、そういう趨勢の中にあるわけですね。」[16]

以下、内容紹介を省いて、メイン企画の表題のみ示すと、六月号は「エイズ・生物兵器説を追う」である。[17]

七月号の告発キャンペーンは、「不公平な竹下税制」を糾弾する！」である。[18]これは、結果的には89年1月消費税法が成立・公布され、四月一日から3％の消費税が実施された。八月号の警告特集は「日本人はこんなに危険なモノを食べている！」で食品添加物の危険性を警告している。[19]

89年4月号、すなわち「創刊一周年号」では、編集後記に土屋編集長は、「昭和が終わり新しい時代が来たという実感が湧きません。激動とか激変というジャーナリズムで頻用される言葉もピンときません。私たちの昨日、今日そして明日も同じように過ぎていきます。・・・本誌の創刊一周年にあたり、水面上の動きばかりでなく、この深淵を探りひとつひとつ丹念に実証することが私たちの仕事であると肝に銘じたいと思います。」と書いている。[20]

最終巻は、90年1月号である。この巻には、橋本治による「桃尻流平成元年大絵巻」と題する「激動する」1989年の年表を掲げた歴史的回顧の記事がある。この扉には、

「1989＝平成元年は、いろいろな事件が起きた。しかし、〈我々〉にはどんな関係があったのか?もしかすると、〈日本は極めて平和だし、景気も順調〈我々〉には直接あまり関係ない事だったような気がする。〈その事が問題なんじゃないか?〉関係ないなんて態度がいけない・・・意見は様々であるが、結論としては、〈人生いろいろ〉となって終わるのが、今年の実相ではないだろうか?10年後にこの、〈人生いろいろ的態度は是非を確実に問われる事になる。〉」[21]と、〈桃尻流〉の予言的な言葉で結ばれている。

『DAYS JAPAN』は、この号で休刊となるが、その後復刊される事は無かった。

5)『DAYS JAPAN』の教育関連言説

創刊第三号の88年6月号のコラム「異論あり！」では、当時ニュースキャスターだった俳優・中村敦夫現参議院議員が「小学校教師をしている友人が言った。三分の一は、教師の出世だけが目的の管理主義追随者、三分の一が、大人になりきれず自分を持てあましている半パ者。残りが、年金目当ての無気力集団、教育問題を考えているのは少数派であるという。・・・文部省のオッサン達よ。あんた達、国民の税金を使って一体、何をどうしようというのかね?」[22]と書き、教師や文部省をやや乱暴に攻撃している。

その後しばらく、教育関連記事は目に付かないようだが、88年12月号に、はじめて学校の現在を告発する大型企画が載る。「カナリア籠学校なんかいらない！」である。この扉には、以下のように記されている。

「坑夫は籠に入れたカナリアを連れてヤマに入った。カナリアがバタバタと苦しみだしたら、危険信号だった。今学校の方から聞こえてくる子どもたちの叫びは、カナリアのうめきではないのか。

一学期の期末テストの結果を知らされたその晩、東京都目黒区の中学二年生の少年が両親と祖母を金属バットと包丁で殺害した。

夏休みが終わり二学期がはじまる。境のところで、新聞報道されただけで、一〇人の子どもたちが自らの生命を絶った。もはや学校はいけにえを捧げる事なしに学期を開始することも終了することもできなくなってしまったのか。私たちのカナリアは、私たちの未来。管理社会の空気が苦しいのだ。・・・」

学校は「世間離れしたゲームの空間」であり、「教育が、学校の不変の規格に全員をはめ込む営みとなっている。・・・」とか、「あらためて学校に目をこらしてみると、いよいよ出口なしの観が強い。一時荒れ狂った子どもたち若者たちの反乱は、巧妙な圧力調整弁の配置と徹底した平定作戦により封じ込められ、内に内にやり場のないエネルギーが屈折し、さまよい閉じこめられている。」とある。[23]

89年2月号には「教育に異論あり」とし、四人の論者が登場している。現社民党衆議院議員・保坂展人は、次のように述べている。

「私は、今薄気味の悪い予言をしなければならない。この十数年つねに〈危機的な状況〉は語られてきた。しかし、これから言うことは、いつものそれとレベルが違う。ついに限界点を突破したと報告すればいいのだろうか。・・・児童館の映画会に子どもが数人しか集まらなくなり、〈お誕生会〉もたいていの場合成立しない。・・・今や子どもたちは時計に支配されるようになり、〈5時15分に会おうぜ〉などと平然と分単位で行動する。そのためには、一人で行動し、熱中せず、クールであることが要求される。雑然とした、予定外の出来事を含めたワイワイガヤガヤの集団遊びは、日本全国から今、急速に姿を消そうとしている。田舎も例外でない。・・・子どもが子どもとして過ごすことのできる時間を奪う者は、必ずおのれの愚かさに泣く日が来ると警告したい。[24]」

さらに、89年3月号には、『ダンス・ダンス・ダンス』を書き上げた、日本を逃れイタリアに定住し久しぶりに帰国した村上春樹へのロング・インタビューがある。

「〈僕〉という主人公は、60年代に十代を送っているわけですね。そしてその時代から価値観を獲得している。70年代にはかれはその価値観を流用してやっていけるわけです。それは異質であるにせよ、一応近接した時代だから汎用できるわけです。ところが80年代には、その汎用が事実上不可能になった。

つまりね、60年代的価値観を支えてきた基盤というものが完全に消滅しちゃったわけです。ネガティヴがポジティヴを内包し、ポジティヴがネガティヴを内包している。

要するにあらゆる種類の価値がお互いに保険をかけあっているようなものなんです。リスクを拡散している。そういう社会では、信念というものはないね。たぶん確信というものがない。

それがいいことか悪いことかというのは誰にもわからない。いいことと悪いことという観念すらない。いいことが悪いことに保険をかけ、悪いことがいいことに保険をかけている社会なんです。そこで〈僕〉がどう生きてゆくか。それを僕は書いてみたかった。」

また、「僕は40になったら日本に定着してのんびりと生活するつもりだった。でもこれじゃどうしようもないね。うんざりする。」と、当時の日本に対する嫌悪感をむき出しにしている。村上は、このインタビュー後直ぐイタリアに戻る予定という。[25]

なお、『ダンス・ダンス・ダンス』中のキー・フレイズとも言える「踊るんだ。何も考えずに、できるだけ上手く踊るんだ」という、80年代に生きぬくためのテーゼを表明したこの村上の言葉は、「今風の倫理の魅力を備えている。」とは、吉本隆明の言葉である。[26]

89年9月号には、「大人のための吉本ばなな、少女学入門講座」がある。当時(89年7月26日現在)、「キッチン」100万部、「うたかた・サンクチュアリ」73万部、「悲しい予感」58万部、「TUGUMI」105万部、最新刊の「白河夜舟」は、早くも50万部を突破したという事実を前にした特集である。

この特集の中でフリー・プロデューサーの藤岡和賀夫(元電通)は、少女たちの共通感覚について、「ただ一つ言えるのは、今の若い人たちというのは、今がすべて通過駅なんですね。通過地点だけあって、到達点がない。言葉を変えれば、その時々のプロセスが大事であって、それを延ばしていった先に何があるのか、問う必要がないというわけ。まあ、気楽な生き方ですね。」と述べている。

「若者向けマーケティング戦略の第1人者」でCNNデイウオッチのディレクター西川りゅうじゅんは、

「物を選ぶ感覚というのが、わりとセツナ的にさらっと楽しめばいいってことじゃないかな。男選ぶときも、いろんな男がいて、こんなときはこんな男。で楽しかったわってね。ディスコに行くんだったらこんな男、旅行に行くんだったらこんな男、勉強教えてもらうんならこんな男、結婚するんだったらこんな男、というふうに、みんなその場その場で男を使い分けたりしている。それでみんなさらっと楽しんでいる。アクセサリーとか服にしても、何か特別な思いがあってこれを選ぶ、というんじゃなくてね。みんなティファニーを買っちゃう。吉本ばななの本を買うのも、それと同じレベルじゃないですか」「今の少女たちって、けっこう大事に育てられてきているから、小さい頃から、私はヒロインよという意識をずっと持ち続けているんだと思います。・・・

昔『なんとなく、クリスタル』ってあったでしょ。あの本が売れたのは、その作品世界というか生活スタイルへの憧れからだったわけ。ところがばななの読者にはそれが全然ない。作品の世界に引っ張られるのじゃなくて、あくまで自分の生活がメインなんです」などと論じられている。[27]

89年10月号には、「宮崎勤からの挑戦状」がある。「幼女連続惨殺事件の被疑者・宮崎勤は数理パズル・暗号の異才でもあったという驚くべき新事実が判明した。」として、人気のある情報誌のパズルページの高校時代からの常連投稿者であったことなどを明らかにしている。ここに紹介されている宮崎のつくったパズルを論評する能力は私にはないのでそれは省略する。パズル投稿者時代を知る編集者は、「宮崎は、大抵の若者が興味を抱くファッションにもほとんど関心をもたなかった。大抵はジーンズに、中年男性がよく着るような白地にブルーの縞のポロシャツであった。」などとあり、些細な宮崎情報まで求められた当時の関心の高さが分かる。[28]

ともあれ、現在も公判の続いている宮崎勤事件は、当時増殖中だったオタクへの社会的関心を一挙に高めたことはよく知られているので、多言を要しないであろう。

ここでは、「オタク」の定義を確認しておきたい。新語研究家・亀井肇による解説は、次のようなものである。

「1989年の言葉。パソコンやファミコン、ビデオ、アニメなど一つのことにのめり込んでその世界に自分自身をすべて投入し

てしまう人間。・・・特定の世界においてはすべてのことを知ろうとする知識欲はすごいが、それ以外はほとんど無関心である。」[29]

ただし、オタク「族」という呼称は、オタクたちにとっては違和感を感じるとされる。別冊宝島『オタクの本』まえがきに、「おたくの現場に近い人ならばけっしておたく族なんて言葉は使わない。おたく族というのは、太陽族と同じくらいくだらない風俗用語にすぎない。」[30]といっている。その理由はここでは特に説明されていないが、正しいであろう。

なお、東浩紀は最近の著作で「おたく世代」を三層に分類している。すなわち、60年前後生まれを中心とし、「宇宙戦艦ヤマト」や「機動戦士ガンダム」を十代で見た第一世代、七十年前後生まれを中心に先行世代が作り上げた爛熟し細分化したオタク系文化を十代で享受した第二世代、八十年前後生まれを中心とし、「エヴァンゲリオン」ブームのときに中高生だった第三世代とし、それぞれの世代の趣味志向は微妙に異なっているとされる。[31]

１９８０年代の末に若者時代を送った人々は、東の分類では、第2世代に属することになる。当然の事ながら、彼らは２００２年には、32歳から41歳位までの年齢に達している。

東の分類によるオタク第一、二世代世代の子どもが学齢期に達している現在、「オタク」の研究は、私は極めて重要だと考えているが、それは後の課題にしたい。

またこの号には、ノンフィクション作家・二見喜章による「新・日本の名門高」の特集がある。ここでは次のような解説をしている。

「現代企業はどんな人材を求め、どういう大学の学生を重用するのかをテーマに、私が日本を代表する超一流企業―東京電力、新日鉄、本田技研工業、日産自動車等々の採用担当部課長にインタビューした時、彼らが異口同音に語った〈企業が求める人間像〉とは、判で押したようにこんなものであった。・・・情報化社会が定着するにつれて、企業が求める人材も当然のように変わってきた。欧米先進国に追いつき追い越せ、を合い言葉に企業活動をしていた時代は、真面目で頭のいい学生を求め、そうした学生が比較的多くいる旧帝大系やそれに準ずる国立大学及び早稲田・慶応に人気が集中、各企業はこれら有名一流大学生の獲得に躍起となった。しかし、高度情報化社会を形成した昭和50年代の後半になると様相は一変し、トレンド（時流）に敏感な学生が求められるようになった。

今日では地方の国立大学生よりも首都圏の2、3流でもいいから私立大学生の方が〈人材として優れている。〉と受けとめられている。

さまざまな情報が集まる首都圏、ことに東京で4年間のモラトリアム人間生活を送った学生には、感覚の鋭敏さ、発想や思考の柔軟さ、変化に対応する早さ等々があり、何よりも〈遊び心〉が身に付いている。これは21世紀の企業活動を考えたとき、欠かすことの出来ないメンタルだ。」

また、「東大を頂点としたピラミッド型の階層組織は瓦解し、新たに早稲田、慶応を頂点としたヒエラルヒーが誕生している。」[32]とも言っている。

「バブル崩壊」後、私大離れが進行した事を知っている我々は、この叙述に全く信頼を置くわけにも行かないが、言葉半分に受け取ったとしても、「何よりも〈遊び心〉が身に付いている」大学生を求めていた時代であったとは、考えさせられものがある。

89年11月号には、「講演天国ニッポンの大金持ち文化人30人」

の特集があった。これが廃刊の原因となったことは、すでに触れた。

この号では、前号に続き、「続日本の名門高、大都市周辺の名門高」の特集も組まれた。ここでは、大都市（東京、大阪）周辺の進学校を紹介している。

「今年度の地価調査によれば、大都市中心部の地価は伸び悩み、周辺部の上昇率が著しいという。これと同じ事が、今、教育の現場でも発生している。ドーナツ化現象で膨れあがった人口に呼応して、郊外型の高校が、驚異的なレベルアップを示しているのだ。それは、〈ネオ名門校〉の胎動ともいえるだろう。」

これが扉の言葉である。[33]

89年12月号には、半ページ分のコラムだが、当時31歳で「論壇誌にものを書き始めた」頃の大塚英志が、「オタク」世代の立場から当時の事件を解説していることも時代を知る良い手がかりだ。ヘッドフォン・ステレオでポップスを聴いていた21歳の都立大生に「ボリュームを下げてほしい」と注意した39歳の公務員が殴打され、二ヶ月の重傷を負った東急・大井町線の車両中でおこった事故、毎日新聞記者が暴走族とのトラブルで死んだ事件の二つである。これらは当時若者に非があるとされた事件らしいが、大塚は、「自分の側に正義があると見ると〈注意〉と称してケンカを売る」大人の側の思い上がりを正そうとしている。[34]

6) おわりに

「団塊ジュニア世代」が高校生から大学生であった89年前後は、彼らにとって受験競争加熱の時代であった。学校ストレスは極度に高まっていたと思われる。（前掲、図3、学校種別在学者の推移参照）その証拠は、これまでみてきた『DAYS JAPAN』の記事からだけでも検証できたと思う。

他方で、大量に産れていたオタクたちの価値観と行動様式は、従来の学校的価値観と正反対の方向に向かっており（というよりは、彼らにすればそうせざるを得ない環境におかれており[35]、この動向に対する有効な手段を当時の文部省はほとんど打出しえていなかったといえよう。しかし、その後の文部省による高校の多様化、大学入試の多様化策、文部省なりのこういう状況の矛盾に対するそれなりの対応策であったと位置づけられうる。しかし、さらに教育環境が悪化している現時点からみると、もっと抜本的改革が早期になされていれば、その後も更に続いた日本の教育やそれをとりまく環境の混乱は回避しえたのだろうかと思ってしまう。

世界構造が大きく変わった八十年代末には、上にみたように多くの社会矛盾・教育矛盾は山積していたが、結局日本社会の大きな変革（構造改革）はできなかった。92年の「バブル崩壊」とともに日本社会の混迷は更に深まり、92年夏には自民党政権が崩壊し、細川連立政権、村山連立政権が相い次いで誕生し、消滅した。

ともあれ、村山政権下で阪神淡路大震災が起こり、オウム真理教事件が発生した。オウム真理教事件は、「オタクの連合赤軍」というとらえ方があり、この事件前後から、オタク以後世代に新しい変化が生じていると言われる。

「いじめ」や「不登校」・「ひきこもり」の著しい増加が、日本の学校教育制度を揺がす事態に発展してきたのである。

付記　前稿「冷戦後の日本の教育と若者のゆくえ―冷戦後日本教育史試論―」（本紀要、51号）の後半部分で、金沢大学の「学生

の懲戒に関する申し合わせ」の「薬物の自己使用についての罰則」について、私の一部誤解があったことが畑安次先生（当時学生部長・現副学長・法学部）のご指摘で分かりました。ここにその事を明らかにし、お詫びします。

注

1) 吉本隆明「わが転向」『文藝春秋』１９９４、４
2) 大塚英志『〈りぼん〉のふろくと乙女ちっくの時代』ちくま文庫、１９９５、２
3) 千石保『まじめの崩壊』サイマル出版会１９９１、５
4) 宮台真司『まぼろしの郊外』（初版、１９９７年11月）朝日文庫版、２０００、３　１４０pなど
5) 香山リカ『自分を愛するということ』講談社現代新書、１９９９、６　24―5P
6) 大塚英志『戦後民主主義のリハビリテーション』角川書店、２００１、７　５６６p
7) 『教養としてのまんが・アニメ』講談社現代新書　２００１、５　118―119p
8) 『DAYS JAPAN』１９８８年４月号　２７０p
9) 『DAYS JAPAN』１９９０年１月号　２４２pなお、本誌の「男性ヴィジュアル誌」としての歴史的位置については、「男性ヴィジュアル誌はなぜ失敗するのか」（『別冊宝島雑誌狂時代』）を参照。
10) 中島梓『コミュニケーション不全症候群』１９９１、８　筑摩書房、ちくま文庫版25―29p参照
11) 『DAYS JAPAN』
12) 『DAYS JAPAN』１９８８年４月号１０２―１３３p
13) 『DAYS JAPAN』同右号　16p
14) 『DAYS JAPAN』同右号　31p
15) 『DAYS JAPAN』１９８８、５月号p
16) 『DAYS JAPAN』１９８８、５月号、44―５p
17) 『DAYS JAPAN』１９８８、６月号　78―１０５p
18) 『DAYS JAPAN』１９８８、７月号　76―89p
19) 『DAYS JAPAN』１９８８、８月号　46―69p
20) 『DAYS JAPAN』１９８９、４月号、２９０p
21) 『DAYS JAPAN』１９９０、１月号、92p
22) 『DAYS JAPAN』１９８８、６月号、１３５p
23) 『DAYS JAPAN』１９８８、12月号、１５２―１７３p
24) 『DAYS JAPAN』１９８９、２月号、１７１p
25) 『DAYS JAPAN』１９８９、３月号、46―50p
26) 吉本隆明「ダンス・ダンス・ダンスの魅力」『群像日本の作家、村上春樹』小学館所収　２１９p
27) 『DAYS JAPAN』１９８９、９月号、97―１０１p
28) 『DAYS JAPAN』１９８９、10月号、12―19p
29) 亀井肇『平成新語・流行語辞典、外字苑』、三省堂、２０００、７、77p
30) １９８９、12 JICC出版局、
31) 東浩紀『動物化するポストモダン―オタクから見た日本社会』講談社現代新書、２００１、12、13p
32) 『DAYS JAPAN』１９８９、10月号、１０４―１１１p
33) 『DAYS JAPAN』１９８９、11月号、１０８―１１５p
34) 『DAYS JAPAN』１９８９、12月号、78p
35) 前掲中島梓『コミュニケーション不全症候群』参照